

みちのく国体から 希望郷いわて国体へ

希望郷いわて国体まであと一年。前回本県で開催されたみちのく国体はどのような大会だったのだろうか。当時を知る人たちに話を聞いた。



高橋 忠成さん
(本通り)

27年瑞宝単光章受章。
みちのく国体開催時は東北管区警察局岩手県通信部勤務。無線の保守要員として天皇陛下の行幸に帯同した。沿道を埋めた人の数は忘れられないと話す。



県内各地での盛り上がり

第25回国民体育大会、通称「みちのく国体」は岩手県を舞台に1970年に開催された。県内各地で競技が行われ、炬火リレーが県内を巡り、天皇・皇后両陛下が県内を行幸されるなど競技の他にも各地でにぎわいを見せた。

高橋忠成さんは天皇陛下が県内をご訪問されたときの様子を「どこに行っても沿道は人で埋め尽くされ、旗を振って陛下を歓迎していた」と鮮明に覚えていて。当時、東北管区警察局岩手県通信部に勤務。無線の保守担当として自動車御列の無線車



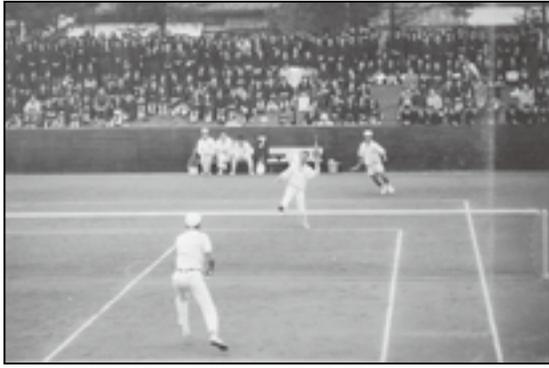
天皇杯

に乗り隊列の中にいた。「無線の保守要員が自分一人だけで緊張の連続だった」と、みちのく国体の思い出を振り返る。

天皇陛下が県内を行幸されているころ、市では常盤台市民テニスコート会場にソフトテニス競技が、展勝地市民球場を主会場にソフトボール競技が行われ、連日熱戦が繰り広げられていた。常盤台市民テニスコートと展勝地市民球場はどちらもみちのく国体のために造成された施設だ。新たに造られた施設に連日、市民が詰めかけた。

市開催競技で優勝

その真新しいコートで岩手県教員



及川 健二さん
(北鬼柳)

北上市・国体推進課長。みちのく国体開催時は小学生。ボーイスカウトでボランティアに参加した。現在は希望郷いわて国体の準備に奔走している。



関村 則保さん
(上野町)

みちのく国体ソフトテニス教員の部優勝メンバー。選手として10回、監督として8回国体に出場。国体優勝時のペア瀬川さんと現在も試合に出場している。

男子の部(現在は廃止)の出場選手は躍動した。全試合で出場3組が3勝し完全優勝を成し遂げたのである。優勝メンバーの一人である関村則保さんは「完全優勝は後になって気付いたこと」と話し、優勝のポイントを、初戦の栃木県との試合で1番手の阿部・松本ペアが緊張のため一時リードされたが何とか逆転で勝利したこと。京都府との決勝で1番手の飯塚・藤原ペアがリードされていたところに勝負をかけ、同点、逆転としたことと振り返る。会場の様子も「応援はすべて岩手の応援団サッカーでいうところの『ホーム』だった」と回想する。

及川健二さんはその応援団の中で、地元選手に声援を送っていた。当時小学生でボーイスカウトとして参加し、プラカード持ちや会場の清掃などのボランティアを行っていた。

「決勝戦は雨のため常盤台のコートから黒沢尻北高校の体育館に会場が変わった。岩手の大会で岩手のチームが優勝したので満員の体育館の熱気がすごかったのを覚えている」と話す。ソフトテニス教員男子の活躍もあり、県は男女総合優勝―天皇杯獲得―、女子総合第三位という輝かしい成績を収めた。

希望郷いわて国体へ

及川さんは現在、市の国体推進課長として一年後に迫った希望郷いわ

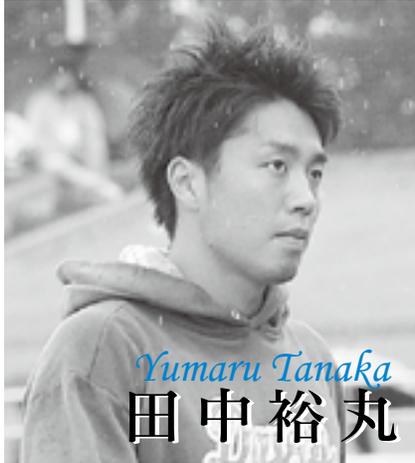
て国体・いわて大会の準備に奔走している。「国体の運営に携われることは光栄なこと。同時に半世紀に一度の大きなイベントなので重圧もある」と心境を語る。希望郷いわて国体では競技場や関連施設の新設はない。既存の施設を改修し大会を運営する。それを象徴するように、みちのく国体で使用された炬火台―現在岩手県営陸上競技場(盛岡市)に設置―を北上陸上競技場に移設して使用することが決まっている。みちのく国体と希望郷いわて国体を「繋ぐ」という意味が込められているという。みちのく国体で任務を果たした高橋さんは「次の国体は仕事を気にする必要がない。北上がメイン会場なので陸上などをのんびり観戦したい」と来年を心待ちにしている。

ソフトテニス教員の部で優勝を経験した関村さんは「地元の国体に出場できるのはめぐり合わせもあり、ごく限られた人だけ。準備を怠らせず、自分の納得がいく試合をしてほしい」と出場する選手へエールを送る。今でもみちのく国体に出場したときの瀬川さんとのペアは続き、40年近く一緒に試合に出場している。

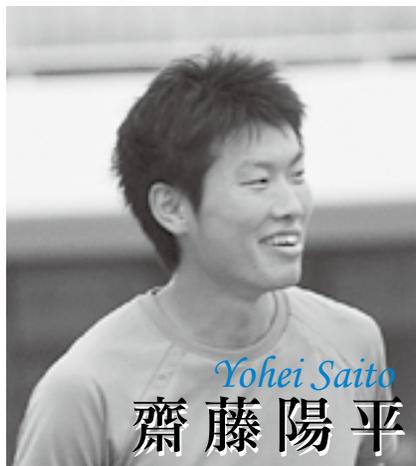
「選手が練習の成果をきっちり出せるような大会運営をしたい」と担当課長として来年に思いを巡らせる及川さん。「観客、ボランティアみんなが感動をわかちあえるような国体になりたい」と力強く語った。

希望郷いわて国体・いわて大会まであと1年

陸上：走り幅跳び 自己ベスト 7m71
1990年生まれ 大阪府出身
06兵庫国体少年男子走り幅跳び優勝
13日本陸上男子走り幅跳び第9位



フェンシング：サーブル
1986年生まれ 秋田県北秋田市出身
09アジア選手権大会男子サーブル団体2位
10世界選手権大会出場



陸上：110mハードル 自己ベスト13秒93
1992年生まれ 秋田県横手市出身
12岐阜国体男子成年110mH 第7位
13日本学生個人選手権110mH 第4位



ソフトテニス 1990年生まれ 盛岡市出身
08大分国体ソフトテニス少年男子の部優勝
(宮城県代表として出場)
15全日本社会人選手権大会ベスト8

いわて国体に懸ける

希望郷いわて国体の開催に向け競技力を向上させ盛り上げを図ること、今後の地域スポーツの振興を図ることなどを目的として、市は4人のアスリートを職員として採用した。競技を続けるために生活の拠点を換え、仕事と競技の両立を目指す選手が北上にいる。

市は昨年、今年とそれぞれ2人のアスリートを職員として採用した。生活の拠点を北上に移し、市の職員として日常業務をこなしながら選手として挑戦を続けている。練習時間の確保や練習相手の問題など競技だけをしていない頃と異なった悩みを直面している。

フェンシングの工藤さんは日本代表として世界大会出場の実績がある。得意種目のサーブルでは「県内に練習相手がいらない」と話し、週末に練習相手を求め関東などに遠征に行くことがある。

兵庫国体の走り幅跳び少年男子の部で優勝経験のある田中さんは「学生の頃と比べ練習時間は3分の1程度になった」と話す。「練習時間は限られているが効率良くやる方法はあるはず」と今の環境にあった練習方法を探している。

ソフトテニスの南郷さんも高校生の頃、大分国体少年男子の部で優勝している。練習時間が短くなったことで「技術の向上よりも技術を維持することで精いっぱい」と話す。「効率のよい練習で練習時間の不足を補う」と前を向く。

「もともと練習時間は長いほうではないので練習時間は気にならない」と話すのはハードルの齋藤さん。今は「仕事を覚えたり生活のリズムに慣れるのが大変」と練習以外の苦勞を語る。

合宿や試合など、特別な場合に業務の配慮を受けることはあるが、日常の練習は業務が終了してからだ。限られた時間で最高のパフォーマンスを目指し、4人は明日から開催される和歌山国体に臨む。

